

特集 

# 松前 国際交流の芽

トモダチになりませんか。  
カイガイからやってきました。  
コトバやブンカの違いに  
毎日ドキドキ、ワクワクです。  
ナカヨクなりましょう。



ベトナム



タオさん(西高柳)

伊予弁は難しい。「分からんけん」が、分かりませんでした(笑)

リンさん(西高柳)

松前町の印象は、空気がきれいで、静か。先月、雪を初めてみました。

アインさん(西高柳)

休みの日は、近くを散歩します。何もかも珍しいから、それだけでも楽しいです。

リンさん(松山市)

日本に来て、まだ3カ月。いろいろな所にいきたいです。

アンさん(松山市)

日本の友達が多いです。もしできたら、お話ししたり、文化を紹介したりしてほしいです。

ルエンさん(松山市)

ベトナムには日本の会社が多いので、日本語の勉強をもっと頑張りたいです。



- ㊦ アインさんたちの日常。旧正月を祝ってパーティー。魚介類や野菜を入れるラウ(鍋料理)やフォー(米粉麺)など、異国の料理が並ぶ
- ㊦ 普段の仕事着。「仕事は楽しくて、多くを学べる」とにっこり

松前町西高柳。心とむ日本の田園風景が広がるこの地に、彼女たちは住んでいきます。

アインさん、リンさん、タオさんは、珍味加工業者の(株)龍宮堂で、技術を学びながら働くベトナム人実習生です。

この日は、松前町文化協会30周年記念式典で、伝統的なベトナム舞踊を披露しました。出演を取り計らった三好茂商工会長は、「松前町には実はたくさん外国人がいて、龍宮堂にもベトナム人と中国人がいる。文化協会30周年を記念して、何か国際交流的な楽しいことをしたいと思った」と話します。

仕事が終わってから、20回

ぐらい集まって練習したというベトナム舞踊に、式典の参加者は、「とても素敵だったよ」と声を掛けていました。

同式典で「なごり雪」を歌ったアインさんは「日本で有名な歌を調べて、練習した。うまく歌えなかったけど、日本のことを知りたいと思っていったからよかった。日本の人ともっと話したい。日本の文化を教えてほしい。私たちが、ベトナムのことを伝えたい。そうして、もっと、お互いに、近くに感じたい」とさらなる松前町民との交流を心待ちにしているようでした。

### ■友達の声

アインさんたちの踊りを見に来ました。私たちが、旗袍(チャイナドレス)を着て、踊ってみたい。もし、日本の友達ができたら、一緒に好きな桜を見に行きたいです。



チョウさん (西高柳) シュウさん (西高柳)



「日本が、ベトナムが、お互いに近くに感じることができるようになりたい。」



## Step1 種をさがす



松前町に住む外国人は、116人。その人の数だけ、国際交流の種の数がある。まずは、身近に住む外国人を紹介します。

アビルさん (神崎) アルバートさん (神崎)



近年、交通手段やインターネットなどの情報手段の発達により、世界の人・物・情報の流れが地球的規模に拡大する「国際化時代」となっています。松前町にとってもそれは例外ではなく、現在約10カ国、116人も外国人が町内に住んでいます。でも、彼らが何をしたいか、どんなことを思っているのかを知っている人は少ないのではないのでしょうか。松前の国際交流を考えるにあたって、まず、彼らの紹介をします。

鉢花の生産や卸売りを営む福岡農園で働く、アビルさんとアルバートさん。「日本の農業を学びたい」「キャリアアップをしたい」と、外国人技能実習制度を利用して日本にやって来ました。技能実習制度とは、最長3年間、日本の進んだ産業・職業上の技能や知識を習得することを目的とした制度で、町内の約半数の外国人がこれを利用してきます。

日本に来て2年半ほどのアビルさんは「福岡農園でたくさんのお金を学んで、お金を貯めました。フィリピンに



「ペゴニアの花は、とてもきれいです」とにっこり。愛嬌たっぷりの笑顔が咲く



枯れた花を摘む作業。慣れた手つきで進める

帰ったら、大学に行って農業の勉強を続けたい」と照れながらも自分の夢をはっきりと話します。

日本に来て4カ月のアルバートさんも「フィリピンに帰ったら、自分で農業を経営してみたい」と意気込んでいます。

そんな2人を福岡農園代表の福岡則和さん(松山市)は、「彼らは、仕事ぶりも本当にまじめで覚えが早い。いやな顔一つしないで働いてくれます。そして、男の人を『サー』、女の人を『ママ』と敬意をもって呼んでくれる。本当に愛嬌がありますよ」と誇らしげに話していました。

# 種を育てる

いかに、国際交流の種を育てるか。  
町の現状と先進地の事例を知ること、  
未来の可能性を探ります。

松前町にもあった国際交流の種。それをいかに育てるかが大事ですが、現在は種がほとんど野放しになっているようです。

(財)愛媛県国際交流協会の  
大森典子さんは、松前町の在住外国人について「松前町を訪れたとき、たくさん外国人の実習生がいることに驚きました。でも彼らは、ほとんど地域の人と関わりを持っていないんです。実習生同士でコミュニケーションを作り、休みの日も一緒に過ごしている。実習生たちはよく、日本人のトモダチがほしいという話をしているのですが」と現状を話します。

では、松前町民は、国際交流や外国人にまったく興味がないのでしょうか。  
まさきふれあい学園の「世界知っ得講座・世界の味めぐり Part.5」は、外国の料理を作り、その国の人の生活の話を聞く町民企画講座です。町内の人にも国際交流の機会を持つてもらおうと、まさき国際交流の会が、年に3回実施しています。今回は、砥部町在住の大東アリンさんおほひがしとフィリピンを講師に、フィリピンについて学びました。

簡単レシピの説明を受けた後は、さっそく調理開始。ココナッツミルクと黒砂糖をふんだんに使うおやつに、参加者は「こんなに砂糖入れて大丈夫？」と戸惑い気味です。完成したおやつをほうばると皆さんやはり、「あまーい」の一言。でも、これが「フィリピンの流の甘さ」とアリンさんが言うので、驚きです。他にも、「フィリピンの子どもは、学校のお昼ごはんをカフェで買います。おやつは、ミリエンダといって、朝にも、3時にも食べます。」などアリンさんの話に、参加者は「日本とはだ

話は聞く町民企画講座です。町内の人にも国際交流の機会を持つてもらおうと、まさき国際交流の会が、年に3回実施しています。今回は、砥部町在住の大東アリンさんおほひがしとフィリピンを講師に、フィリピンについて学びました。

簡単レシピの説明を受けた後は、さっそく調理開始。ココナッツミルクと黒砂糖をふんだんに使うおやつに、参加者は「こんなに砂糖入れて大丈夫？」と戸惑い気味です。完成したおやつをほうばると皆さんやはり、「あまーい」の一言。でも、これが「フィリピンの流の甘さ」とアリンさんが言うので、驚きです。他にも、「フィリピンの子どもは、学校のお昼ごはんをカフェで買います。おやつは、ミリエンダといって、朝にも、3時にも食べます。」などアリンさんの話に、参加者は「日本とはだ

は国際交流の活動はまだまだ少ないが、関心を持っている人は多い。一緒に子どもたちにも、国際交流の輪を広げていけたら」と話していました。  
「国際交流をしてみたいという人がいる」松前町にも国際交流の種を育てられる可能性は十分ありそうです。



### 参加者の声

いろいろな外国や料理のことは、本やテレビを見れば分かるけど、やっぱり実際にやってみたい。もっとこういう機会があれば、参加してみたいです。



中塚 寿美子さん  
Nakatsuka Sumiko  
(宗意原)

- ㊦ 「黒砂糖をこんなに入れるの？これで合ってるの？」未知なる料理は、驚きでいっぱい
- ㊦ 完成したピコ(ココナッツ入りのお餅)。日本人には想像以上の甘さだ

## 国際交流は可能性へとつながる。 松前町にもきっと可能性はあるはず。



(財)愛媛県国際交流協会  
外国人生活相談室長

大森 典子さん  
Omori Noriko

松前町にも外国人はたくさん住んでいます。まずは、身近にいる外国人を知ることから交流を始めてほしいですね。彼らと話していると、文化や言語を学ぶことはもちろんですが、自然と海外に目が向くようになります。そして、異国のことをより知っていくと、私たちには当たり前前なのが、一歩外に出ると、とても必要とされていることに気がきます。  
例えば、県では現在、農業交流事業としてスリランカで愛媛みかんを栽培していますが、スリランカが愛媛みかんの技術を、こんなにも必要としてくれるとは思いませんでした。松前町にも実習生は技術を学びに来ているのだから、そういった地域の力はきっとあるはず。国際交流を積み重ねていき、いろいろな可能性に気付いてほしいです。

いぶ違うのね」と驚いていました。  
まさき国際交流の会事務局長の濱田淳司さんはまただじゆんしと南黒田なみくろだは、「国際交流の魅力は世界のさまざまな文化を知ると、異なった価値観を尊重し合っ

て生きていくことの大切さに気付かされること。松前町では国際交流の活動はまだまだ少ないが、関心を持っている人は多い。一緒に子どもたちにも、国際交流の輪を広げていけたら」と話していました。  
「国際交流をしてみたいという人がいる」松前町にも国際交流の種を育てられる可能性は十分ありそうです。

## 国際交流の魅力先進地から学ぶ「内子町×ドイツ・ローテンブルク市」 積極的な交流の積み重ねから生まれる新たな可能性

内子町は、ドイツ・ローテンブルク市と平成13年に友好都市盟約を、23年には姉妹都市盟約を結び、積極的な交流を積み重ねています。  
交流の始まりは昭和61年。町並み保存をテーマに内子座で開催したシンポジウムに、中世の面影を残す町並みの保全で有名な同市から、オスカー・シューバルト市長(当時)を招いたことがきっかけでした。  
その後、両市町民による交流が続く中、平成6年、国際交流の母体として(財)内子町国際交流協会が発足。  
町民が内子町の国際親善・国際理解の担い手として、さまざまな活動にボランティアで関わっています。活動の核となるローテンブルク市との交流については、協会発足の翌年から、毎年15人前後の学生を同市に派遣しており、派遣生たちはホームステイや現地でのプログラムの経験から視野を広げています。  
また、同市で本場のハム・ソーセージ作りを学んだ内子町の青年は、現在(株)内子フレッシュパークからりにおいてハム・ソーセージを製造。本場ドイツの味が楽し



昨年11月の第18回海外派遣。ライヒスシュタット高校で

め、町の名物の一つになっています。一年間同市に滞在した町職員(2人)はドイツの町並み保存や環境政策を学び、その経験をエコロジータウン内子のまちづくりに生かしています。  
現在は姉妹都市提携を機に、新たな分野への取り組みも始まりつつあります。木工や和紙などの職人で結成され、盟約締結記念展示会に出展した「内子手しごとの会」は、今春、同市で展示販売に挑戦する予定です。会は「文化の交流はものづくりの発想の飛躍につながる」と、伝統技術などの文化交流に意欲を燃やしています。また町は、低迷する林業分野においてドイツの手法から内子独自の展開を探るなど、新たな試みを検討しています。  
内子町とローテンブルク市の積極的な交流の積み重ねは、互いに刺激し合いながら、新たな可能性を生んでいます。

## 外国語や文化を知ると、仕事、友達、全ての 機会が広がる。そして、自分の世界が広がる。

3年前から、松前町の小中学校を中心にALTとして英語を教えています。英語を教えるときは、「楽しむこと」を最も大事にしています。ゲームやアクティビティをたくさん取り入れると、子どもたちは、好奇心を持って参加してくれます。その好奇心が楽しみになり、楽しみが自信につながっていく。外国語や異文化を積極的に知っていくと、仕事、友達など、全ての機会が広がります。そして、自分の世界も広がります。私も、日本語や日本文化を知ろうと思ったことで、世界が広がって、この仕事についています。もし、子どもたちが将来、アメリカに行くのであれば、広い心を持って飛び込んでいってほしいです。アメリカはいろいろな移民がいて、文化や言語が混ざっている国。いろいろな性格の人たちがいます。外国語や異文化を知るとは、本当におもしろい。私も日本のことを知って、より理解が深まり、より知りたくなっています。まさに国際交流することは、「生涯学習」です。



マイケルさん (松前町ALT)

アメリカ



1. ジェスチャーが豊かなマイケルさん。それだけでも文化を感じる
2. 積極的に英語を話す健心くん。「Melon, please!」
3. ゲームやパソコンを使った授業。生徒の好奇心が湧く
4. 英語であいさつ。異文化交流の第一歩



松前町にはたくさん外国人が住んでいます。そして彼らは、「松前町民と友達になりたい。交流したい」と話しています。まずは、気軽にあいさつをしてみるだけでもいいのです。その一歩が、松前国際交流の芽となります。

彼らの言語や文化に触れてみると、ふつと好奇心が湧きあがってきます。異国とのつながりを持つと、不思議と自分の夢が大きくなっていきます。未知の世界に対するドキドキ、ワクワク。そんな感情を子どもたちだけでなく、国際交流に熱心な人だけでもなく、松前町民全員が持つとどうなるでしょうか。

松前国際交流の種が、どんな芽を出すか。全ては、松前町に住む外国人に興味を持つことからスタートします。

### 松前国際交流の始め方

## Step3 芽を出す

異国の世界を知ったときの、ドキドキ、ワクワク。その気持ちを町民全員が持てば、きっと、松前国際交流の芽は出るはず。

「How are you?」と「どうマイケルさんのあさつに、子どもたちは「Great!」「Sleepy!」と、思い思いの返事をします。岡田小学校5年2組の児童は、この日、2年前から必修化された英語の授業を受けていました。始まってものの数分で「教科書を閉じてください」とマイケルさんの声。ここから、子どもたちの好奇心ががちりつかむ、アクティビティの時間が始まります。まずは、ビンゴゲーム。楽しみながら、果物の英単語を学びます。そして、覚えた英単語で、自分好みのフルーツパフェを、マイケルさんに注文。元氣いっぱい英語を話す児童たちに、間違いを気にしたり、恥ずかしがったりする様子はありません。

篠崎健心くん「西高柳は、「ゲーム感覚で楽しめるからいい。だから、英語や外国のことを知るのが好きです」とこり。「楽しむこと、好奇心を持つてもらうことが一番大事」と話すマイケルさん。生徒とマイケルさんの間には、確かに、ドキドキ、ワクワクの好奇心が交流していました。

